

## 高く掲げられた救い主

[マタイによる福音書 27 章 27～56 節]

それから、総督の兵士たちは、イエスを総督官邸に連れて行き、部隊の全員をイエスの周りに集めた。そして、イエスの着ている物をはぎ取り、赤い外套を着せ、茨で冠を編んで頭に載せ、また、右手に葦の棒を持たせて、その前にひざまずき、「ユダヤ人の王、万歳」と言って、侮辱した。また、唾を吐きかけ、葦の棒を取り上げて頭をたたき続けた。このようにイエスを侮辱したあげく、外套を脱がせて元の服を着せ、十字架につけるために引いて行った。兵士たちは出て行くと、シモンという名前のキレネ人に出会ったので、イエスの十字架を無理に担がせた。そして、ゴルゴタという所、すなわち「されこうべの場所」に着くと、苦いものを混ぜたぶどう酒を飲ませようとしたが、イエスはなめただけで、飲もうとされなかった。彼らはイエスを十字架につけると、くじを引いてその服を分け合い、そこに座って見張りをしていた。イエスの頭の上には、「これはユダヤ人の王イエスである」と書いた罪状書きを掲げた。折から、イエスと一緒に二人の強盗が、一人は右にもう一人は左に、十字架につけられていた。そこを通りかかった人々は、頭を振りながらイエスをののしって、言った。「神殿を打ち倒し、三日で建てる者、神の子なら、自分を救ってみろ。そして十字架から降りて来い。」同じように、祭司長たちも律法学者たちや長老たちと一緒に、イエスを侮辱して言った。「他人は救ったのに、自分は救えない。イスラエルの王だ。今すぐ十字架から降りるがいい。そうすれば、信じてやろう。神に頼っているが、神の御心ならば、今すぐ救ってもらえ。『わたしは神の子だ』と言っていたのだから。」一緒に十字架につけられた強盗たちも、同じようにイエスをののしった。さて、昼の十二時に、全地は暗くなり、それが三時まで続いた。三時ごろ、イエスは大声で叫ばれた。「エリ、エリ、レマ、サバクタニ。」これは、「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」という意味である。そこに居合わせた人々のうちには、これを聞いて、「この人はエリヤを呼んでいる」と言う者もいた。そのうちの一人が、すぐに走り寄り、海綿を取って酸いぶどう酒を含ませ、葦の棒に付けて、イエスに飲ませようとした。ほかの人々は、「待て、エリヤが彼を救いに来るかどうか、見ていよう」と言った。しかし、イエスは再び大声で叫び、息を引取られた。そのとき、神殿の垂れ幕が上から下まで真っ二つに裂け、地震が起こり、岩が裂け、墓が開いて、眠りについていた多くの聖なる者たちの体が生き返った。そして、イエスの復活の後、墓から出て来て、聖なる都に入り、多くの人々に現れた。百人隊長や一緒にイエスの見張りをしていた人たちは、地震やいろいろの出来事を見て、非常に恐れ、「本当に、この人は神の子だった」と言った。またそこでは、大勢の婦人たちが遠くから見守っていた。この婦人たちは、ガリラヤからイエスに従って来て世話をしていた人々である。その中には、マグダラのマリア、ヤコブとヨセフの母マリア、ゼベダイの子らの母がいた。

## [1] 「本当に、この人は神の子だった」へと導いていく

今日から「受難週」を迎えました。来週の日曜日はイースター礼拝を守ります。私たちはこの教会歴を「年中行事」として捉えてはいけないと思います。ある意味止むを得ない所もあると思いますが、今から「来週はハッピー・イースター！ どう楽しく過ごそうか」ということに気を取られてしまったら、今この時の主のお苦しみと十字架の死というものがとても軽くなってしまおうと思います。

主の十字架と復活というのは、確かにドラマチックです。最高のドラマと言ってもいいでしょう。しかしそれを劇場や映画館で鑑賞するようにしているだけで、少々感情移入して、どちらかと言うと、イエス・キリストに対して同情的に客観的に眺めるようであるならば、聖書の物語は自分のものにはならないと思います。聖書が伝えたいメッセージは、今日読んだ物語の中で、ローマの百人隊長が思わず語った告白にあると思います。27章54節です。「**本当に、この人は神の子だった**」。—「あなたにとってイエスは誰か」。聖書はそれを私たちに突き付けているのです。それは、聖書の御言葉を静かに思いめぐらす（黙想する）中で、この主イエスのお苦しみと死の出来事は、「私」という者がどういう存在であるのか、それを“炙り出す”のだと思います。そしてそこでこそ、この**イエスこそが神(の子)だ、救い主だ、**という告白に神様は導いてくれるのだと思います。

## [2] 主の沈黙の中で

今日の聖書の物語は、歴史上確かに起こったことを基に福音書記者が書いたものと言えらると思いますが、特徴があると思います。それは、今日の所では、イエス・キリストの言葉はほとんど記されていないということです。主はずっと「沈黙」されています。27章11節で総督ピラトから尋問を受けた際に「**お前はユダヤ人の王なのか**」と聞かれた時、「それはあなたが言っていることです」とお答えになってから、息を引き取られるまで、ほんの一言しか記されていません。その一言とは、十字架の上の「**エリ、エリ、レマ、サバクタニ**」の叫びだけです。福音書記者は、ある意味冷静に、起こったことだけを順を追って記しているのです。

森 有正というキリスト者の哲学者が『ドストエフスキー覚書』という本の中、「ドストエフスキーの『罪と罰』について」という文章の中にこんな言葉を書いています。私は本当にその通りだなあと思ったのです。森 有正はこう書きます。—「罪は神秘ではない。道徳的なものではない。それは最も客観的な意味における現実そのもの、我々に赦しと回復、その現実そのものの回復を迫る絶対の現実なのである。我々の正しい罪の認識は聖書によるべきものであり、それは正しい神認識と切り離すことが出来ない。この問題について、ドストエフスキーの『罪と罰』

は、深き指針と洞察とを与えてくれる。それは罪を自覚しないラスコーリニコフをめぐりながら、その深き相をまざまざと展開し、しかしそこに同時に、既に、赦しの現実が成立していることを教えている」。

—このことは、『罪と罰』を持ち出すまでもなく、正に聖書、聖書そのものが私たちに示してくれていることではないでしょうか。

さて、今日読んだ聖書の箇所で、（本当は 27 章 11 節以下から続いています）主は沈黙しておられると言いましたが、それとは裏腹に、その周りには人々の怒号や叫び声、からかいの声、また、イエスの体を鞭打つ音、茨の冠をかぶせられた拳句、唾を吐きかけられ、葦の棒で頭を打ち叩かれる音などが聞こえてきます。人間の醜さが浮き彫りにされています。しかしここで考えたいのです。彼らはいわゆる「悪人」なののでしょうか？ たまたまこの時悪い人間ばかりがイエスの周りに集まっていたのでしょうか？ そうではないでしょう。きっと家に帰れば、家庭思いの良き父親、子供や孫のことを可愛がる普通の心を持っている者たちに違いないのです。しかし時に人間は、**得体の知れないもの**に囚われてしまう。神の子をからかい、他の人々の声と一緒に、「十字架に付けよ！」と叫んで、まるで娯楽のように死へと追いやってしまう。この場面はとても緊迫していますが、それはこの沈黙の主のお姿に、かえって人間たちがその隠された「本性」というべきものが炙り出された場面ですよね。**家族を可愛がるのも、神の子を殺すのも、同じ「私」**なのです。聖書はその人間の本性を「罪」と言うのですね。今日の十字架をめぐる物語の中で、週報にもお書きしましたがけれども、様々な登場人物の中に自分の姿を見ることが出来るのではないのでしょうか？ それは一面、とても厳しいことです。しかし私たちは、そこでこそ、**主の十字架の意味**を見せて頂ける。「**本当に、この人は神の子だった**」と言わせて頂けるのだと思います。

### [3] 新しい時代が始まった—この「世界の王」を仰げ

私は今日の箇所の中で新しく教えられたことがありました。それは人物描写ではなく、二つの極めて客観的な描写や現象の中の福音書のメッセージです。

一つは、27 章 37 節に、「**イエスの頭の上には、「これはユダヤ人の王イエスである」と書いた罪状書きを掲げた**」あります。ヨハネによる福音書を見てみると、この罪状書きは、**当時の世界語であるギリシア語、ラテン語、そしてヘブライ語**で記されていたと書いてあります。彼らはこれをからかいや遊びのようにして書いたのですが、**ゴルゴタの丘の上の十字架の主イエスこそ「真の王」**と告げた言葉となっているのです。そして、そこに居た人々は一つまりイエスを十字架に付けた人々は一この証しとなった罪状書きを、皆仰いでいるのですね。不思議ですね。まるでイエス様が「**わたしこそまことの王だ、支配者だ、あなたを赦す権威を持っている**」

者だ」と十字架の上から言っているかのようです。そして実際そうなのだと思います。マタイ 21:42 でイエス様はこう言われました。「聖書にこう書いてあるのをまだ読んだことがないのか。『家を建てる者の捨てた石、これが隅の親石となった。これは、主がなさったことで、わたしたちの目には不思議に見える。』—今、この方、捨てられた石となったこのお方は、私たちの罪を超えて、高く高く掲げられる存在となって、私たちを、御腕を広げ、赦しを受けることを待ち構えているのですね。

もう一つは、主が息を引き取られた（そのことによって主の御わざが完了した）ということが、**宇宙的・地球的な出来事**だという暗示がここにあります。まず、昼間だというのに、全地が暗くなりました。しかし、その後、聖書にはこう書かれています。「イエスは再び大声で叫び、息を引き取られた。そのとき、神殿の垂れ幕が上から下まで真っ二つに裂け、地震が起こり、岩が裂け、墓が開いて、眠りについていた多くの聖なる者たちの体が生き返った。」—マタイは、主の十字架の死によって、新しい時代が始まったのですよ、世界史の大転換ですよ、といったことを憚らずに語った。後の世代の人々に告げたのです。

現代の私たちは、今、ここに立っているのです。旧約のユダヤ人だけではない、誰もが文字通り、**宇宙的な大きな神様によってとらえられている**のです。このコロナの時代の中にあっても、神様のご愛は全く変わりません。それどころか、私たちが経験するあらゆる苦悩を味わい、引き受け、今私たちと共におられるお方こそ、まことの王、主イエス様です！そしてこの方は黙って、世界は自分のために回っている、と傲慢にも思っている**私たちの罪を全部負って**下さいました。それは、私たちのそのような罪、いえ、私たち自身を赦して、神の国に迎えてくれるためです。「**岩が裂け、墓が開いて、眠りについていた多くの聖なる者たちの体が生き返った。**」これは、主の復活によってもたらされる大いなる御わざの先取りではないでしょうか。「**本当にこの方は、神の子であった。**」—十字架の上に掲げられた救い主を、この一週間仰いで行きましょう。自分の罪を悔い改めながら。そして、今度の主日、**主の復活**の大きな恵みにご一緒に与りましょう。

最後に、ローマの信徒への手紙 8 章 1~2 節をお読みしてお祈り致します。

—「従って、今や、キリスト・イエスに結ばれている者は、罪に定められることはありません。キリスト・イエスによって命をもたらす霊の法則が、罪と死との法則からあなたを解放したからです。」